

〔編集後記〕

2015年4月より編集主幹を担当することになり、就任挨拶を兼ねて〈編集後記〉を自ら執筆することにした。本誌は札幌医科大学の設立後早々に発刊され、札幌医科大学の歴史とともにあり、その学術の面を映しだす鏡の役割を果たしてきた。私が大学院生の頃（1980年代後半）までは、本誌に学位論文を提出し、医学博士を取得していく卒業生が多数を占めていた。大学院生が英語論文で学位を取得するのが珍しい時代である。大学院の期間内にアクセプトされないと修了できず、臨床に戻る時期が決まっている学生は本誌に学位論文を提出し、学位を取得後、臨床に戻って研究を続けデータを補足して、また所属教室の仕事としてデータを足して英文雑誌に投稿するようになった頃で、日本語で論文を出すより、英文で論文を出すことの重要性が本学教員の共通認識になりつつあった時期でもあった。

他面、研究者の評価が研究の質よりも重さ（論文数）でされると揶揄された時代でもあり、和文と英文で同じデータを使い廻す二重投稿が問題になり始めた時期でもある。すでに論文となっている写真の上下を逆さまにした、又はネガを反転させた写真を図として使っている論文を査読して差し戻したという話を恩師から聞かされたことがある。二重投稿は、読者が限定されていた時代ですら研究者としての資質が問われる事案であり、印刷されたものは言語を問わず全て検索されることを前提としなければならない現代では、一層の厳密さが要求されるのは本誌といえども同じである。

英文論文を出すことが教員の評価に繋がるとともに、学位論文掲載誌としての本誌の役割は漸減した。自らの研究を世界中の研究者に発信することは極めて重要な事であり、英文雑誌に投稿することを持って学位申請論文と認める本誌規定の変更は、英文論文執筆のインセン

ティブになるだけでなく、大学の理念である「国際的・先端的な研究を進めます」にも沿う。しかしながら、1年以内に他誌でアクセプトされなければ本誌に原著論文として掲載が決まるという規定は、編集主幹の立場としては好ましいものだが、本人ばかりではなく大学としても推奨されることではない。それぞれの科学者コミュニティにおける厳密な査読を受け、よりインパクトのある雑誌に学位終了後1年以内にアクセプトされるように博士号取得者は努力すべきである。

学位申請論文掲載誌としての本誌の役割は首座を下りざるを得ないが、学内の研究を読みやすい日本語で紹介する場としての必要性は増していると思われる。研究分野が細分化され多彩になるにつれ、学内教員の研究者としての顔が見えにくくなっている。これまでの〈教室研究紹介〉に代わって、本号から長年教室の研究を主導して来られた教授の研究について総説の形式で自ら紹介していただくことにし、皮膚科学講座の山下利春教授、口腔外科学講座の平塚博義教授、呼吸器・アレルギー内科学講座の高橋弘毅教授に忙しい中執筆して頂いた。教授として取り組んできた研究の一端を知ることができる素晴らしい内容である。本年度で退職される山下教授の論文には、これまでご自身が行った研究の流れが分かり易く書かれており、医学研究者のあり方としても参考になることが多い。さらに、学内研究者の最新論文の内容紹介を第一著者に執筆して頂く項を新たに設けた。最新の優れた研究成果を分かり易い図とともに簡潔に説明したものである。

本年度より、査読方法・投稿規定など他誌を参考に改訂している。来年度号もより多くの人に本誌を読んで頂けるような編集を心がけるつもりである。

（編集主幹 三高 俊広）